

Daily

人と直接ふれあうこと、 そして楽しいことが大事

0歳から6歳までの子ども達を預かるたけみ保育園。子ども達と直にふれあうこと、そして子ども達がホッと出来るような居心地のよい場所になることを心情として保育園を運営している社会福祉法人竹実会 たけみ保育園の園長、原本宏志さんにお話を伺いました。

「竹実会という名は『雨にも風にも強く、竹のように子ども達がぐんぐん育ってほしい』という願いから付けられたと聞いています。」たけみ保育園は、昭和47年に原本さんの祖母にあたる木村としさんが初代理事長となり開園しました。2代目の父から引継ぎ、平成19年3月、3代目園長に原本さんが就任。園の活動やさまざまな行事を通して、園児が大人になっても忘れない『心の財産（宝物）』が1つでもできるような保育に努めています。「子どもに嘘はつけません。そして約束は破りません。子どもはちゃんと覚えています。どんなに忙しくても耳を傾けて話を聞いてあげると、ちゃんと慕ってくれるんですよ。」職員室にいる原本さんの様子を子ども達が代わる代わるのぞきに來ては、一人一人に温かな笑顔で応えていました。

たけみ保育園のある地区は子どもの人数は比較的多いそうですが、少子化は黒石市も例外ではありません。現在の児童数は91人ですが、10年前は120人程でした。「市内には、保育園と幼稚園合わせて18施設（無認可除く）ありますが、定員割れの施設もある現状です。担い手も年々減っていて、最近はなかなか保育士が見つかりません。」たけみ保育園は20代から60代までの職員が常駐。平成20年に初めて男性保育士を採用し、現在活躍中です。「黒石の子ども達がまちなかに行く機会は七夕祭りやねぶ



原本宏志さん（はらもと・こうじ）／たけみ保育園3代目園長

たの時くらいで、土日は弘前市や郊外に遊びに行くことが多いみたいですね。保育園では市内の良い場所を巡るお散歩の時間があります。松の湯交流館ができれば、お散歩の途中に松の湯でお弁当を食べられたらと思います。松の湯交流館で黒石の楽しいところをアピールして、地元の人や観光客のリピーターも増えるような場所になると良いですね。」

インタビューの最後に、温泉の思い出を話してくださいました。「朝4時から開いているつがる温泉によく通っています。お風呂にはいろいろな情報が集まりますよね。携帯やパソコンなどの文字でやり取りするよりも実際に人と話るのが大事だと思っています。子どもの頃はいわき温泉に入って、女湯に向かって「でるよ」と母に声をかけていました。そして何より、お風呂上がりに好きだったのはイチゴ牛乳…。松の湯の番台が可動式だったら楽しいですね。」と、コーヒー牛乳よりもイチゴ派だった原本さんらしい楽しいアイデアもいただきました。

子どもの頃にまちなかへ出かけて、いろいろな人やまちの歴史に直に触れた記憶は大人になっても心に残るはず。さらに、楽しかった気持ちはなかなか忘れられません。たけみ保育園で子ども達の元気な様子を見ていて、子ども達の笑い声が響き渡るくらいに楽しい出来事が松の湯交流館で展開される可能性を感じました。

編集後記

松の湯交流館の完成はこの冬を越してからとなりますが、「松の湯レター」第3号では、一足早く完成予想の平面図をご紹介します。

建物内部は全面的にリニューアル・・・と感ずるかもしれませんが、実は、以前の松の湯の良さをしっかりと受け継いでいます。浴室や浴槽の復原、番台の再設置など、文字通りに旧来のものを引き継いでいるところもあれば、多くの人が集まって裸の付

き合いができる銭湯の良さを、誰もがあずましく過ごすことができる広場やサロンとして場に活かしているところもあります。情報がお湯のように湧き出ることをイメージした情報ブースは、現代の情報シャワーのようになるのでしょうか。

さて、鳴海さんにご登場いただいた「Voice」では、「伝統を受け継ぐ」ということをじっくり考える機会となりました。先代から受け継いだ家や歴史、文化、人との交流を大切にしながらも、常により良い

ものへと進化させていくことがさらに次の世代へのバトンとなるのかもしれませんが。先代への敬意を払いつつ、いつも探究心を持って過ごしていきたいですね。

今年も残りわずかとなりました…。皆様、どうぞ良いお年をお迎えください。来年はいよいよ松の湯オープンです。（津田）

松の湯レター 第3号
発行日：平成26年12月21日 / 発行：NPOまちづくりデザインサポート / 編集・執筆：津田純佳 / 図面作成協力：高橋潤 / 後援：黒石市、黒石市教育委員会 / 問い合わせ先：NPOまちづくりデザインサポート 東京都世田谷区代沢2-22-7
info@urbandesignsupport.com

松の湯レター 第3号

No.3 / 2014年12月

News：まちの情報と、まちづくりのアイデアと、市民や観光客の声が交差する松の湯交流館
Voice：伝統と守り伝えるために学び、新しいことに挑戦する
Daily：人と直接ふれあうこと、そして楽しいことが大事



まちの情報と、まちづくりのアイデアと、市民や観光客の声が交差する新しい松の湯



来年夏にオープンする新しい松の湯の名称が公募により「松の湯交流館」に決定しました。工事もいよいよ佳境に入っています。上の写真は、りんごの花香る今年5月の写真です。敷地内の2つの白い囲いは、保存された女湯(右)と土蔵(左)です。

今回は、新しい松の湯はどのような使い方ができるのか、少しだけご紹介します。

語る、くつろぐ、知る・・・交流の場

右頁の平面図は市が中心となって市民や専門家が検討を重ねた松の湯交流館の完成予想図です。旧松の湯はこみせ通りの重要伝統的建造物群保存地区の伝統的建造物に定められているため、その外観は昔の建物の姿に復原され、内部は全面的にリニューアルされます。

松の湯交流館は、市民と観光客が互いに楽しみ、交流できることがコンセプトです。以前の男湯は、展示やイベント、音楽・演劇の発表会などが開催できる「市民サロン」に。隣の「談話コーナー」はイベントの控え室にも適役です。実は、銭湯の頃に小さな床屋さんとして活躍した場所でした。

「交流の間」と「お休み処」は畳敷きで、誰でも気軽にくつろげる場所。床の間や炉も用意され、茶道や華道などにも使うことができます。また、「市民サロン」と一体的な利用も可能です。

以前の女湯は、黒石の観光情報や歴史などをじっくり調べられる「観光案内所」「情報ブース」に。なんと、女湯の浴室や浴槽はそのまま復原され、モニターやLAN配線が設置され、

黒石のさまざまな情報を調べることができる予定です。かつて情報交換の場であった銭湯の良さを引き継いでいきます。

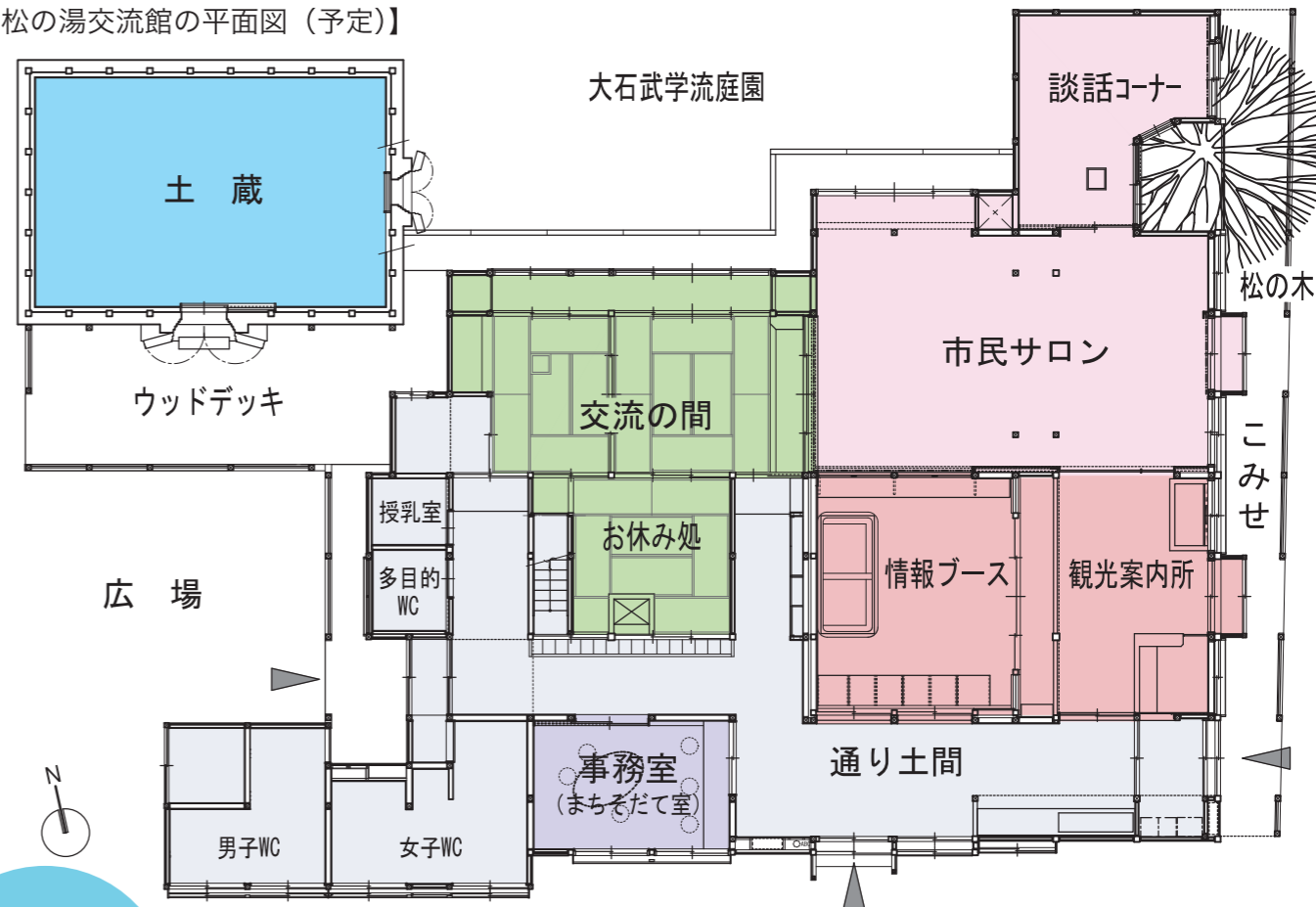
野外スペースは、屋外イベントや青空市が開催できる天然芝の「広場」に。「土蔵」の活用は未定ですが、今後の活用方法に期待です。また、「交流の間」からは津軽地方特有の大石武学流庭園を望めます。大石武学流は金平成園や鳴海醸造店で有名ですが、松の湯の庭園はこの流派で作庭されることになりました。そしてもちろん、松の木はこれからもまちの目印として活躍してくれます。

市民と行政と一緒にまちを考える

注目したいのは、松の湯交流館はこれからのまちづくりを進める拠点になることです。松の湯交流館は市が直営で運営を行うため、まちそだて推進係が「事務室(まちそだて室)」に引っ越し、まちなかで市民の声を聞きながらまちづくりを進めていきます。まちの将来へ向けて、市民と行政と一緒にアイデアをふくらませる場所ができそうです。



【松の湯交流館の平面図(予定)】



Voice 「伝統を守り伝えるために学び、新しいことに挑戦する」

—鳴海醸造店 代表取締役・第七代当主 鳴海信宏さん

私は実家の造り酒屋(鳴海醸造店)の長男として生まれ、高校を卒業した後に東京農業大学の醸造学科に進学しました。大学では、一般教養から専門の微生物学などを学び、知識を蓄えさせて頂きました。卒業後、父親(鳴海醸造店六代目)が酒類問屋の経営もしていた関係で、そちらも学びたいと東京の下町の酒類問屋で3年間修業させて頂きました。

平成5年に地元に戻りましたが、一昨年に酒類問屋を売却して造り酒屋一本で商売して行くことになりました。営業でデパート等の試飲会などに参加して商品構成が不足していることに気づき、純米吟醸酒・大吟醸酒・契約栽培の無農薬米で造る商品を次々と発売していきました。と同時に、鑑評会で金賞を取ろうと酒造講習会に積極的に参加し流行の酒造りを学んできました。

今は黒石には造り酒屋は二軒しかありませんが、明治の中頃には醤油の醸造元も含めて35蔵がありました。それだけ八甲田山の伏流水が豊富でミネラルを含んだ美味しい水に恵まれていたことを示しているのです。青森県内初の「黒石市地酒による乾杯を推奨する条例」が制定され、二社ますます励んでいかなければと思っています。

文化財に暮らしていると観光客も多いのでプライベートな部分がないですね。また、屋根も広く雪おろしで大変です。2年前の大雪では梁が折れたり酒造りの他に頭を悩ませる部分が多いです。裕福な時期は、専属の大工やトタン屋がいてすぐ修理していたのを覚えています。今は、毎年少しずつ補修していますが、同時に経営も良くして伝統を守っていきたく考えています。できるだけ文化財というプレッシャーを感じないように心掛けています。

旧松の湯は子どもの時に1度入ったことがあります。家の内風呂の調子が悪い時で、父親と一緒に入りました。こみせから松の木が突き抜けているのが子どもながらに珍しかったです。この間、松の湯の向かいの西谷家さんがお店を開けていて、たくさんの方が入っているのを見かけました。松の湯交流館ができれば、さらに人の流れができて、さまざまなアイデアが生まれてくるのではないかと思います。まちの活性化につながると良いですね。



左：鳴海信宏さん(なるみ・のぶひろ)鳴海醸造店7代当主。/右：鳴海醸造店の酒蔵には、かつて使われていた2,000升の酒を仕込んでいた木の樽が今も残っています。

